

みなみうおぬま むい かまちふじづか 南魚沼市 六日町藤塚遺跡調査現地説明会資料

令和5年11月3日(金・祝)
公益財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

3 遺物

調査が終わった1・2区では、浅いコンテナ 10 箱ほどの遺物が出土しました。ほとんどが土器で、釉薬の掛かっていない素焼きのものでした。土器の種類は、土師器・須恵器と呼ばれるもので、他にごくわずかの陶磁器片（鎌倉時代・江戸時代）、鉄鏃などがみつかりました。1区は古墳時代の土器が大半を占め、2区は平安時代（9世紀）の遺物が主体を占めるという、対照的な出土状況となりました。

古墳時代の遺物は、1区北端の SX2922 から古墳時代後期の土師器の杯・甕・高杯が、また最下層から古墳時代中期の須恵器の甕が出土しました。



土師器 杯（はじきつき）



須恵器 甕（すえきかめ）

※接合作業中



古代の遺物は、土師器・須恵器で構成され、食器が多くみられました。また、SD3038 からは墨書土器1点、鉄鏃1点が出土しています。



墨書土器（ぼくしょどき）



鉄鏃（てつぞく）

1 遺跡の概要

六日町藤塚遺跡は、南魚沼市余川に所在し、国道17号六日町バイパス及び国道253号八箇峠道路建設事業にともない発掘調査を実施しています。遺跡は魚沼丘陵の東側、庄之又川により形成された標高180mの扇状地上に立地します。

六日町藤塚遺跡の本格的な発掘調査は平成29年から始まり、今回が6回目になります。これまでの調査で、古墳時代から中世にかけて断続的に集落が営まれていたことが明らかとなりました。古墳時代は中期から後期（5世紀から6世紀）の集落で、祭祀あるいは廃棄にともなう土器集積遺構や周堤が残る竪穴建物などがみつかっています。古代では飛鳥時代から奈良時代の掘立柱建物などが確認されました。

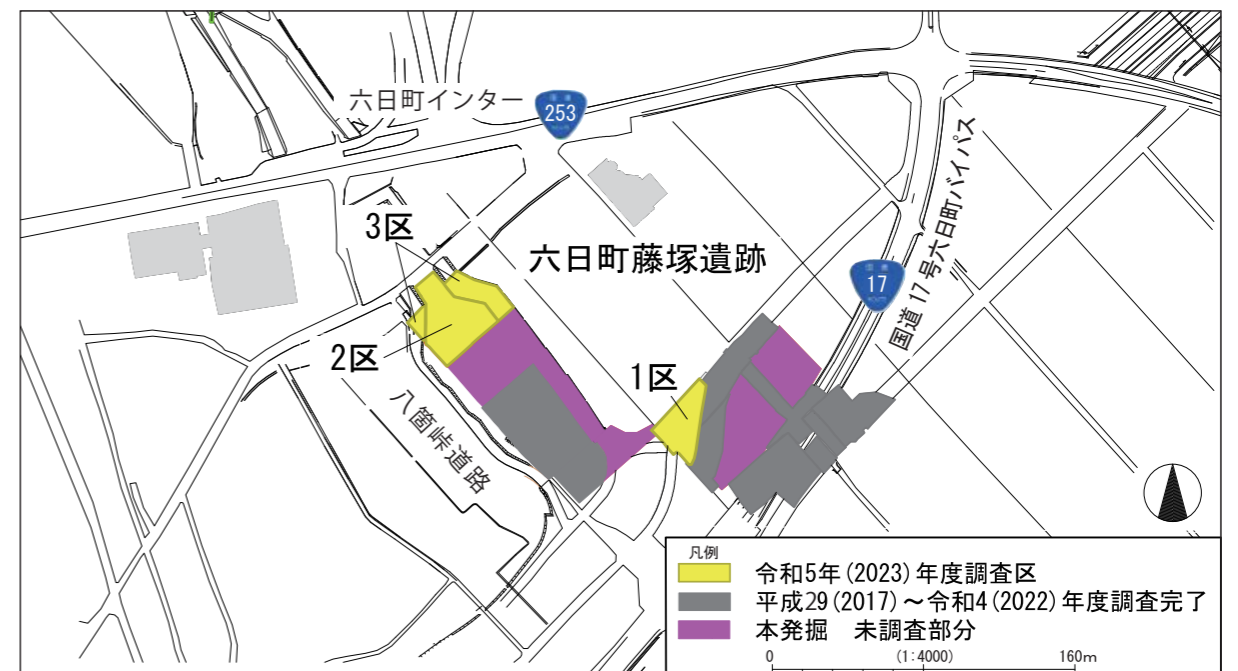
令和5年度は、3つの工区に分けて調査をすすめています。1・2区は発掘調査が完了し、3区は発掘調査中につき本日公開しています。

おもな調査成果としては、1区は古墳時代後期の土器集積遺構が見つかったことがあげられます。また、遺構・遺物がほとんど確認できない場所があり、集落の範囲が明確になりました。

2・3区は規模や性格の異なる溝が確認されました。たとえば、調査区中央に伸びる自然流路と考えられるNR3001、飛鳥時代・平安時代の土器が出土したSD3038、畑作溝があげられます。



調査区全景（上空南東から撮影）



六日町藤塚遺跡 発掘調査位置図

2 調査の概要

1区では、平安時代（第1面・9世紀）と古墳時代後期（第2面・6世紀）、古墳時代中期（第3面・5世紀）の3面を確認しました。平安時代の遺構は溝 13 条、土坑4基、ピット 58 基がみつかりましたが、建物は確認できませんでした。遺物は土師器・須恵器が少量出土しました。

古墳時代後期の遺構は土坑2基、ピット 83 基、不明遺構4基がみつかりました。SX2922からは土器の破片が多量に出土しており、土師器の甕や高杯・杯がみられます。これは「土器集積遺構」と呼ばれる種類の遺構で、周辺の調査でも類例がみつっています。

古墳時代中期は遺構が検出されず、須恵器の甕がほぼ 1 個体、上から押しつぶされたような状態でみつかりました。

隣接地の過去調査では竪穴建物、土器集積遺構を含む多くの遺構がみつっています。今回の調査の SX2922 がある場所までは遺構・遺物ともに豊富でしたが、それより西側からはほとんど確認できなくなりました。地形も沢状に落ち込んでいくことから、この辺りが集落の縁辺と考えられます。

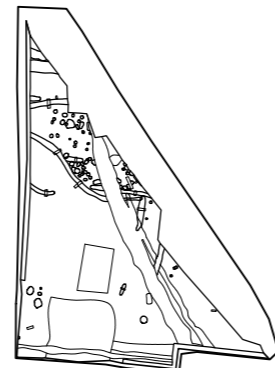
2区では、古墳時代～奈良時代・平安時代前期の2面を確認しました。遺構は、溝・土坑・ピットなど約 140 基がみつかりました。調査区中央を南流する NR3001 は大規模な自然流路です。北側にある金屋遺跡から六日町藤塚遺跡を通り、南に位置する余川中道遺跡方面へ続くと想定されます。NR3001 が形成されたのは古墳～奈良時代頃と想定され、時を経て川底には徐々に土が堆積し浅くなっていき、遅くとも江戸時代のうちには完全に埋没したようです。川底の両端には、岸に沿うように伸びる人工の小溝が合計3条みつかりました。小溝はすべてが同時期に共存していたわけではありません。左岸側の溝 SD3112 からは平安時代前期頃の土器が出土しました。小溝の用途は、導水・排水などが考えられます。



土器集積遺構1（第2面上部）



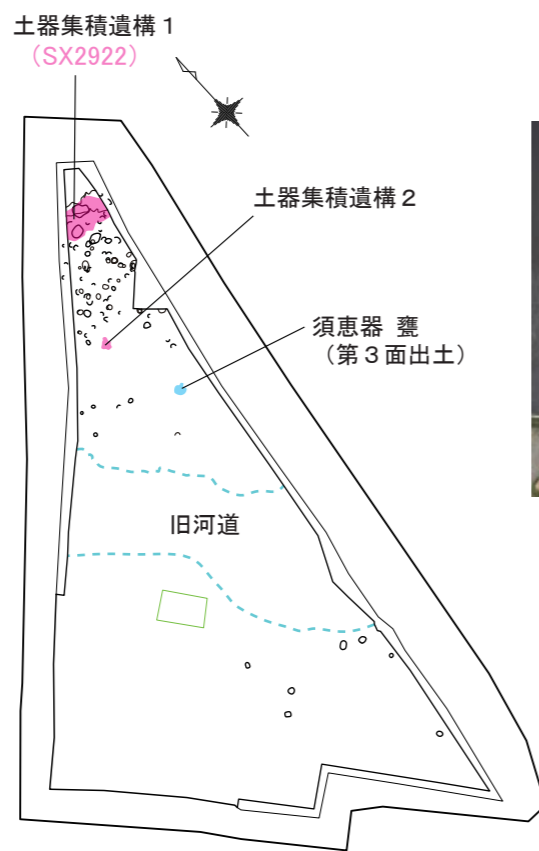
土師器 杯（第2面）



1区 第1面平面図
0 S=1:800 20m



土器集積遺構1（第2面下部）



1区 第2・3面平面図
0 S=1:400 20m



土器集積遺構2（第2面）



須恵器 甕（第3面）



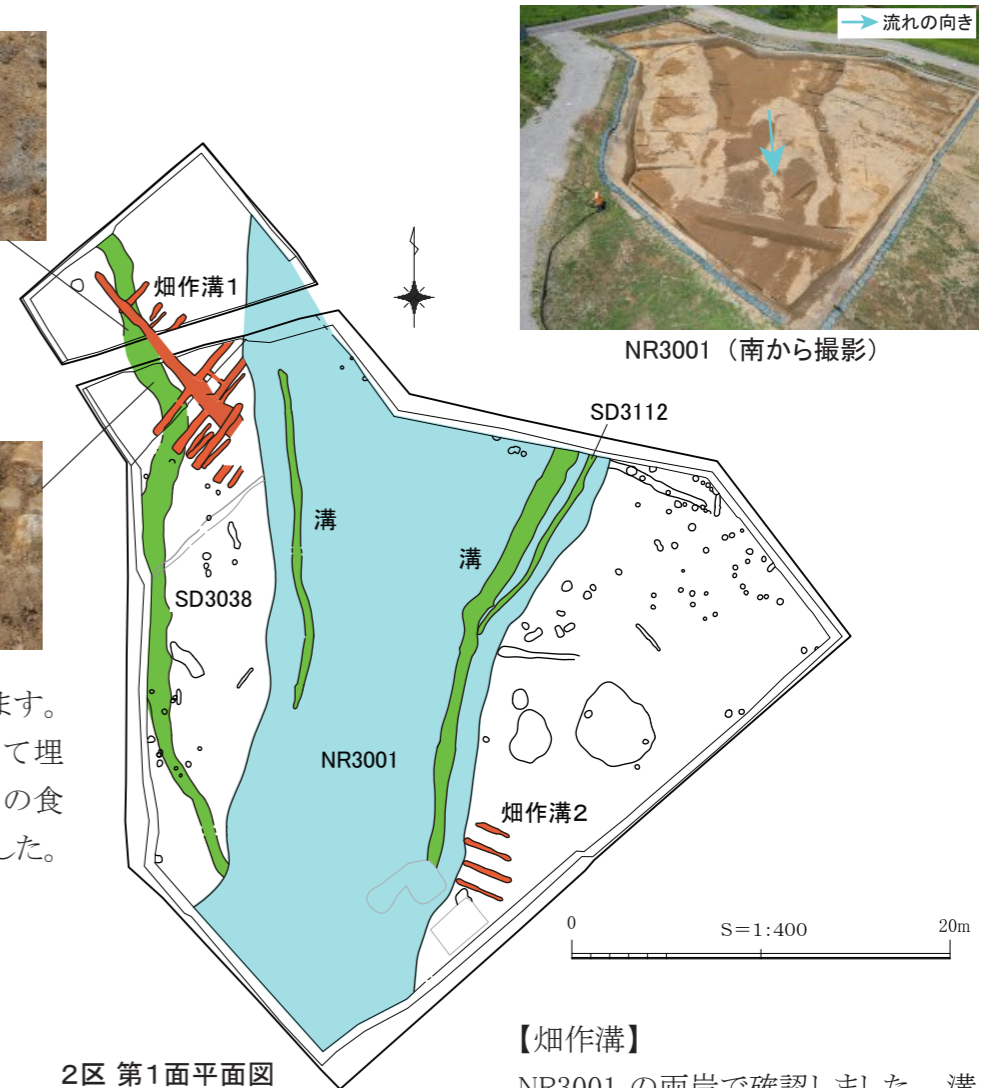
1区 第1面完掘写真
（上空から撮影）



SD3038（北から撮影）



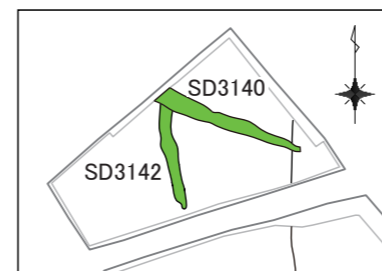
SD3038 は蛇行しながら南流しています。溝は洪水由来とみられる砂礫によって埋まっています。おもに平安時代初めの食器（土師器・須恵器）などが出土しました。



2区 第1面平面図



NR3001（南から撮影）



2区 第2面平面図（北端部）

0 S=1:400 10m

【SD3140・3142】

調査区の北辺に位置し、両溝とも直線的に伸びています。断面形状は半円形を呈し、画一性が認められることから人工の溝と考えられます。地層の観察から、SD3038 より古い溝であることが判明しています。遺物はわずかでした。排水または導水など水路としての機能があったのかもしれませんが。そうした場合、SD3140 は NR3001 へ接続した可能性もあります。

【畑作溝】

NR3001 の両岸で確認しました。溝が平行 / 直交して並んでいます。畑が作られたのは奈良時代以降と考えられ、中世（鎌倉時代・室町時代）まで下る可能性もあります。



畑作溝1